

[論 文]

コールリッジにおける想像力と空想との区別に関する一考察

Coleridge's Imagination—Fancy Distinction

荻野 哉

Ogino Hajime

はじめに

「私は想像力 (Imagination) を第一と第二とに分けて考える。第一の想像力はあらゆる人間の知覚の生ける力、すなわちその主因であり、無限の神における永遠なる創造活動を有限の精神の中で繰り返すものである。第二の想像力は前者の反響であり、意識的な意志と共存しているが、その働きの種類は第一と同じであり、程度と形態においてのみ異なる。それは再創造するために溶解・拡散・消散し、この過程が不可能な場合にも、なお常に理想化し統一しようと努める。すべての客体が (客体として) 固定した死物であるのに対して、それは本質的に生けるものである。

これに反し空想 (Fancy) は、固定的・限定的なもの以外に相手を持たない。実際空想は、時間と空間の秩序から解放された記憶の一様式にほかならない。同時にそれは、選択という言葉で呼ばれる意志の経験的現象と交錯し、それによって改変される。しかし空想は普通の記憶と同様、連想の法則から即座に作られるすべての素材を受容しなければならない¹⁾。」(引用文①)

これは、サミュエル・テイラー・コールリッジが、1817年7月に出版された『文学評伝』第13章で掲げた想像力および空想の定義であり、I. A. リチャーズによれば「想像力と空想との差異に関する彼の最も有名な記述²⁾」である。では彼は、いつ頃からどのようにして二つの概念の差異を認識し、この記述に至ったのであろうか。さらに、うえの定義に対していかなる問題点が指摘し得るだろうか。本稿では、彼の著作中の想像力と空想に関する記述を時代順に取り上げてその弁別意識の成立過程を考察し、さらに引用文①に対する批判的見解を検討することにより、以上の疑問点を解決することを目的とする。

1. 詩的創造能力としての「第二の想像力」概念の成立

コールリッジに二者の峻別意識が最初に萌芽したのが、1796年にウィリアム・ワーズワースと出会った時であったことは、『文学評伝』第4章で証言されている。この「独創的な天才詩人³⁾」が自らの詩を朗読するのを聴いて感動し、その優れた特質がいかなる力から生み出されてくるのかを理解しようとした彼は、以下の推測に至ったと述べている。

「たびたび深く考えた結果、私はまず空想と想像力とは、一般に信じられているような一つの意味の二つの名称、あるいはせいぜい同一能力の低級と高級といったものではな

く、明確にしかも大いに異なる二つの能力ではないかと思うようになった。(そして、人間の諸能力やそれにふさわしい特徴・機能・効果をより詳細に分析した結果、私の推測は立派な確信となった⁴⁾。)

もちろんコールリッジがワーズワースに存すると考えたのは、その詩魂の本質を「観察により得た真実と観察の対象を改変する想像的能力との見事な均衡⁵⁾」と指摘した表現から明らかのように、想像力の方であった。さらに、「私がミルトンを特徴づけた能力に対しては想像力という言葉に限るべきだ⁶⁾」という記述にも注目すれば、彼が想像力を優れた詩的特質の一種として見なす方向にあった可能性は高いと言える。だが、空想と想像力との区別に関しては、当時必ずしも彼の確信どおりではなかった。たとえば、同年に書かれた『諸国民の運命』から、次の部分を見てみよう。

「というのは空想は、／まず暗い精神を墮落させずに、／それに新しい喜びを与える力であり、生き生きとした活発さで／それに膨らむように命じ、[……]／現在の衝動というひどい束縛から／それを解放して、自己統制を教える⁷⁾。」

ここで“Fancy”は活動的な力として歌われているが、引用文①の空想の定義にはそのような能動的な面は見当たらない。また、自己統制を教える力ともされているが、「連想の法則から即座に作られるすべての素材を受容」すべき空想に、自己を制御できるほどの能力があるかどうかは疑問である。すなわち、この“Fancy”は後の「空想」とは異なり、「想像力」的な要素をも含んだ概念である。ゆえに、この時期のコールリッジは、たとえ二つの単語を用いてはいても、二者を明確には峻別できていなかったと言えよう。この曖昧なる境界線は、1802年9月10日付のウィリアム・サザビー宛の手紙になると、若干はっきりしてくる。

「(ギリシアの詩人が扱う) 自然の対象はすべて死んでおり——単なる虚ろな塑像にすぎません——[……] ヘブライの詩人には、このような貧弱なもの——真の想像力に乏しく、知性に欠けるようなもの——は何も見出せません／ギリシアの宗教詩は、せいぜい単なる空想すなわち精神の集合能力であり——想像力すなわち精神の改変・結合能力ではありません。[……] ヘブライの詩人の中では各々の事物はそれ自体の生命を持っていますが、それでいて全一の生命とつながっています。それらは神の中で活動し、生き、存在しています——ニュートンの神学の冷徹な体系が示すように存在していたのではなく／現に存在しているのです⁸⁾。」

まず、空想には想像力と異なり、さまざまな事物を寄せ集める力はあっても、それらを変化させて結び付ける創造性はない、という思想が現れ始めている。さらに注目すべきは、想像力のその創造的な機能——それを働かせるのはここでもやはり詩人である——が、全一の生命である神との関連において語られていることである。この点の解釈に関しては、1801年3月23日付のトマス・プール宛の手紙が手がかりとなろう。

「ニュートンは単なる唯物論者でした——彼の体系では精神は常に受動的で——外的世界の怠惰な傍観者です。もし精神が受動的にあらず、まさに神の像に似せて——しかも最も崇高な意味において、創造主の像に似せて造られているのであれば、精神の受動性に基づいて立てられたいかなる体系も体系としては誤りであるにちがいない、と疑義を持つ根拠があります⁹⁾。」

能動的な精神機能と有機的世界観に対する信奉を表明したこの文章を考慮に入れれば、詩人の想像力の創造的機能と神の天地創造との間に、一種のアナロジーが想定されていた可能性は強い。事実、1804年1月15日付のリチャード・シャープ宛の手紙には、それを認める記述が存在する。

「ワーズワースは、思考と感情の完全で絶え間ない総合を成し遂げ、それらを詩の形式に結び付け、喜びの情熱を有する音楽に結び付け、想像力、すなわちその言葉の最高の意味で私が空想すなわち集合能力にあえて対立させた改変能力に結び付けた唯一の人間です——その意味で想像力は、天地創造の曖昧なる類似物——我々が創造について信じ得るすべてではなく、それについて考え得るすべての類似物なのです¹⁰⁾。」

ここで引用文①の前半部分を再び参照してみよう。二種類の想像力の形態の差異は、無意識的かより意識的かという点に集約されており、根本的に異なる機能が対立させられている訳ではない。ゆえに、神的な創造活動に直接対応する第一の想像力が認識論の一般的な説明であり、その「反響」である第二の想像力が——コールリッジが想像力を詩的特質と関連付けてきたことも考慮すれば——詩作における具体的な創造能力の暗示であると推測できよう。すなわち第二の想像力とは、サザビー宛の手紙から原型が生じ、シャープ宛の手紙に至って完成度を一層高めた概念だったのである。

2. “forma formans” 創造能力としての「想像力」概念の成立

『シェイクスピア論』の1808年1月に書かれたと推定される次の箇所では、空想と想像力との峻別意識が、さらに発展的なものへと進む。

「空想、すなわち集合能力〔……〕

想像力——一つのイメージや感情を前後のそれらにより改変する能力。このことは後に何度も説明されるはずなので、今はその効果の一つ——すなわち、人間の思考と感情のあの究極的目的である統一を生み出すために、多くの事情を一瞬間の思考へと結合する効果についてのみ語ろう¹¹⁾。」

ここでコールリッジは想像力に、多を一に統合する機能を新しく担わせている。では、この「統一」の本質はどのようなものか。また空想には、想像力と同じく一つの思考へと結合する能力はないのだろうか。これらの問いに対してはまず、ヘンリー・クラブ・ロビンソンの『日記』から、1810年11月15日付の記述が参考になる。

「コールリッジは空想と想像力との間に入念な区別を立てた。前者の過多は精神錯乱状態、後者の過多は熱狂状態である。空想とは、遠く離れて存在する事物を恣意的に結合し、それらを一つの統一体へと形成することであり、〔……〕一種の並置によって機能する。他方想像力は、興奮のもとに独自の形態を生じ、作り出す¹²⁾。」

これをもとに、コールリッジの主張を以下のごとく考えてみよう。まず空想では、結合力——連想力と換言しても不都合はなかろう——の作用により、事物（あるいはイメージ・感情・思考¹³⁾）の結合がある類似点を契機として¹⁴⁾生じる。しかしそれらは所詮併存状態のままであり、別の一つの事物を新たに産出する段階に達しているとはかぎらない。一方想像力においては、結合された各々の事物は必ずしも元の形態どおりではなく、別の新しい事物が作り出されている可能性が強い。——1811年4月の次の文章は、この解

積をより確固たるものにする。

「イメージを形成、いやむしろ再形成する力、すなわち受動的な意味での想像力を、私は空想＝幻想と呼びたい〔……〕だが、空想が働きかけるあらゆる形は死んでおり、けっして形成的な形 (forma formans) ではない——〔……〕以上のことより、固定しつつも放散させ、イメージを溶解し曇らせながらもなお魂の中にその生ける意味を残す、溶解力としての詩的想像力の価値と威厳が推論されるのである¹⁵⁾。」

すなわち、受動的な再形成能力でしかない空想が働きかける対象は、いくら結合されても死滅した所産的な形 (forma formata) のままであるのに対して、能動的な詩的想像力は対象を溶解しつつ再創造して、形成的な形へと導くのである。ゆえに、第二の想像力の「本質的に生ける」力とは、まさにこの“forma formans”という生命ある統一を作り上げる機能を指していると考えられよう。そしてその機能の価値と威厳は、『文学評伝』第14章において別の角度から再確認することができる。

「想像力は〔……〕正反対のあるいは不調和な性質のもの、すなわち同一と差異、一般と具象、観念と心像、個体と典型、新奇斬新の感と古くて見慣れたもの〔……〕との間の平衡や調和となって現れる¹⁶⁾。」

相反する事物が融合する際には、類似点を契機として事物が結合する時よりも、確かに能動的で強い力が働くだろう。なお、対立する二者の平衡・調和という図式に関しては、1808年9月の文章「両極は合一する——おそらくこれらの中では、まず平衡する対極に関する私の体系を説明することになるだろう¹⁷⁾」にその源が見出される¹⁸⁾。いずれにせよ、引用文①にあるような空想と想像力との区別意識は、以上に引用してきた記述を経て、1810～1811年にほぼ大枠が固まったと言えよう。

3. ポオおよびロウズの批判的見解の意義

もっとも、数々の推敲を重ねて最終的に到達した引用文①の定義にも、問題点がない訳ではない。以下、二点に絞って議論を進めよう。

(1) 美の創造機能の有無

第一に、コールリッジの言う想像力が「再創造」し「統一」する力であることは確認できた。しかし、それが努める「理想化」とは何か、彼は結局明言していない。「“forma formans”という生きた統一の形成」は確かにその一解答ではあるが、直後に「統一」と続く以上別の解釈を考える余地もあろう。事実エドガー・アラン・ポオは、この問題に独自の解答を与えている。『文学者たち』(1846)から、N. P. ウィリス論の注を見てみよう。

「『空想は結合し——想像力は創造する』と『省察の助け』の著者〔……〕は述べている。これは区別として意図され、そう信じられてきたが、実は程度の差すらない無用の区別立てなのだ。空想は想像力とほとんど同様に創造するが、またほとんど同様に何も創造しない。新しい着想はただ珍奇なる結合にすぎないのである¹⁹⁾。」

『省察の助け』はコールリッジの1825年の著作であるが、そこには冒頭のようなフレーズはない。もっともこの図式自体は、第1～2節の考察に従えばあながちの外れではない。しかし第三文は、「創造する」と「創造しない」の結局いずれを信用すればよいので

あろうか。ポオは第四文を受けて、想像力が新たに創造したように一見思われる事物は既存の事物の結合体だとし、根拠としてグリフィンの例を挙げる。すなわち、想像力の産物であり、現実には存在しないグリフィンという怪獣像は、既知の頭・翼・胴体などの単なる組み合わせにすぎない²⁰⁾。——だが次の部分は、その理論を早くも揺るがす。

「想像力・空想・幻想・ユーモアは、結合と新しさという要素で共通している。その四つの中で想像力は芸術家である。それに示される古い形の新しい組み合わせから、想像力は調和のとれたもののみを選ぶ。結果はもちろん、美そのものである²¹⁾。」

第二文は結合と新しさにおいて、彼が想像力を最上級に位置付けていたことの表れであろう。だが、その最高度の結合と新しさによって「美」という結果をもたらす想像力は、まさに美の創造行為と言えるのではないか。引き続き見てみよう。

「想像力は醜いものからさえも、その唯一の目的であり同時に避け難い試金石でもある美を製造する²²⁾。」

美しさのみならず醜さからも美を創造するこの力は、ロビンソンが証言したコールリッジの想像力、必ずしも元の形態にとらわれずに「独自の形態を生じ、作り出す」想像力の延長線上にある。すなわちポオは、コールリッジに一反論しながら、実はその想像力概念を踏襲し、さらにその唯一の目的を美と断言するにまで至っているのである。そしてこれこそ、コールリッジの「理想化」に対するポオの解釈ではないだろうか。事実彼は、「結合の調和が比較的軽視され、新しさのほかに意外さという二次的要素が加わった時、〔……〕結果は空想となる。大多数の人にはそれは完全に調和のとれたものよりもありがたいが、調和性で劣るというまさにその理由のために、もはや美しくも（崇高でも）ない²³⁾」と、空想の美産出能力を——「並置的に結合する」というコールリッジの思想はやはり受け継ぎつつも——否定している。結局ポオは、基本的にはコールリッジが打ち立てた区別を尊重しつつ、二者の根本的な差異を美の創造機能の有無に帰着させることにより、引用文①中では若干曖昧さが残る「理想」の内容に、具体的な解答を与えたと言えよう。

(2) 想像力における記憶

第二の問題点は「空想は記憶の一様式」との主張である。この主張自体は、“forma formata”をそのまま「受容」する機能を記憶になぞらえたと考えれば納得がいく。では、想像力は「記憶の一様式」ではないのか。いずれの解答にせよ、T. S. エリオットが言うように、「空想と関連付けて記憶を語りつつ、想像力の説明からそれを完全に省略してしまうのは賢明ではない²⁴⁾」ように思われる。

この問題に独自の解答を与えた一人は、J. L. ロウズであろう。彼は『ザナドゥへの道』(1927)の中で、コールリッジの想像力を以下のごとく説明する。まず、コールリッジが会話や読書や自然の観察などから得たイメージは、「意識の薄暮の世界」とでも言うべき潜在意識の領域に蓄えられる。そしてそれらは詩の制作時に、潜在意識と想像的な意識との相互作用によって選択・結合・洗練され、詩的表現として定着する²⁵⁾。すると、彼の想像力は、対象として潜在意識を扱う以上、一種の記憶と言えるのではないだろうか。このことをロウズ自身は、次のような表現で主張している。

「この研究は、空想と想像力とがけっして二つの能力ではなく、一つの能力であるとい

う確信に落ち着くと、私は早くから予感していた。二者の正当な区別は、それらが扱う素材にあるのではなく、作用する能力自体の強さの程度にある。強く緊張している時、想像力は融合し、改変する。だが緊張度を低くすると同じ力は、その最高度の時には分離せずの一つに統合するイメージを、ただ集めて一緒にするにとどまる²⁶⁾。」

ここで彼は、基本的には二者を同じ（記憶）能力と見なし、その差異を緊張の程度に帰着させている。もっとも後半部分（二者が導く結果）に関しては、コールリッジの思想と大差はない。すなわちロウズは、想像力も空想と同様記憶の一様式であるという解釈を新たに付け加えつつも、それ以外の面ではやはりコールリッジの定義を踏襲しているのである。その意味で彼の主張も、ポオの場合と同様、引用文①の若干曖昧な部分に対するより具体的な解答、換言すれば、「想像力にも多くの記憶があるのだから、もしコールリッジのように想像力と空想とを区別するつもりならば、想像力における記憶と空想における記憶との差異を明確にしなければならない²⁷⁾」というエリオットの思想の先駆的存在として、位置付けるのが妥当であろう。

註

Samuel Taylor Coleridgeの著作に関しては、以下のとおり略記する。

- ・ *BL* : *Biographia Literaria*, ed. John Shawcross, 2 vols, London, Oxford University Press, 1907. 桂田利吉訳『文学評伝』（法政大学出版局、1976年）を適宜参照した。
- ・ *CL* : *Collected Letters of S. T. Coleridge*, ed. Earl Leslie Griggs, 6 vols, London, Oxford University Press, 1956-1971.
- ・ *CN* : *The Notebooks of S. T. Coleridge*, ed. Kathleen Coburn, 3 vols, London, Routledge & Kegan Paul, 1957-.
- ・ *CP* : *The Complete Poetical Works of S. T. Coleridge*, ed. Ernest Hartley Coleridge, 2 vols, London, Oxford University Press, 1912.
- ・ *SC* : *Shakespearean Criticism*, ed. Thomas Middleton Raysor, 2 vols, London, Dent, 1960.

(1) *BL*, vol.1, p.202.

(2) I.A.Richards, *Coleridge on Imagination*, London, Kegan Paul, 1934, p.72.

(3) *BL*, vol.1, p.56.

(4) *Ibid.*, pp.60-61.

(5) *Ibid.*, p.59.

(6) *Ibid.*, p.62.

(7) *The Destiny of Nations*, in *CP*, vol.1, p.134.

(8) *CL*, vol.2, pp.865-866.

(9) *Ibid.*, p.709.

(10) *Ibid.*, p.1034.

(11) *SC*, vol.1, pp.191-192. まったく同じ文章が『ノートブック』にもある (*CN*,

- vol.3, Entry 3247)。
- (12) *Imagination in Coleridge*, ed. John Spencer Hill, London, Macmillan, 1978, p.71.
- (13) 以下括弧内は略。
- (14) 根拠は次の文章にある。「次に我々は、(概して似ていないイメージを一つ以上の顕著な類似点によって) 結び付ける能力と考えられる空想を、シェイクスピアが持っていたことを示してきた」(SC, vol.1, p.188)。なおこれも、ほとんど同じ表現が『ノートブック』に散見される (CN, vol.3, Entry 3247, 3290)。
- (15) CN, vol.3, Entry 4066.
- (16) BL, vol.2, p.12.
- (17) CN, vol.3, Entry 3400.
- (18) 同時期の『ノートブック』には次のような文章もある。「両極は合一する——神の崇高なる能力と資質は完全に調和しており、それ故眠りという対立する状態の美德を有している。——調和はこのように生まれる。」(CN, vol.3, Entry 3405)
- (19) Edgar Allan Poe, *The Literati*, in *The Complete Works of E. A. Poe*, ed. James A. Harrison (New York, AMS, 1965), vol.15, p.13. この註の原型は、『ブロードウェー・ジャーナル』誌1845年1月18日号に発表された文章である (N. P. Willis, vol.12, pp.36-40)。また『マージナリア』には、まったく同じ文章が一部収録されている (Marginalia, vol.16, pp.155-156)。この『マージナリア』との重複部分にかぎり、吉田健一訳「覚書 (マージナリア)」を適宜参照した (『ポオ全集』第3巻、創元社、1970年、639-640頁)。
- (20) *Ibid.*
- (21) *Ibid.*
- (22) *Ibid.*, p.14.
- (23) *Ibid.*
- (24) T.S.Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, London, Faber and Faber, 1933, p.78.
- (25) John Livingston Lowes, *The Road to Xanadu. A Study in the Ways of the Imagination*, London, Constable, 1951, pp.91-92, 293-294.
- (26) *Ibid.*, p.103.
- (27) Eliot, *op. cit.*, p.79.